

「わたしたちのフリーハンドなアトラス」について

たとえば教室に貼られていた日本列島中心の世界地図、まっすぐな線で駅を結んでいく電車の路線図、街を歩きながら起動するスマートフォンの地図アプリは、わたしの日々にとって、素直なスタンダードだった。素直な、というのはつまり、ほとんど用心していないということだ。

でも、路線図であらわされている通りに正円を描いてぐるぐる回っているものとイメージしていた山手線は、実際には南北に細長い。

そんなことは別にどうでもいいことだ、と思う。山手線がきれいな丸だと勘違いしていたからって大変だったエピソードなんてこれまでないし、と思う。でも仮に山手線で困らされなかったとしてもだよ、と立ち止まる。どこかの知らない誰かから与えられた地図に従順なまま世界を知っているつもりになっていて、いいんだろうか。

地図アプリが最短距離の表現として振り付けてくる右折と左折の連続を、本当はたいして急いでなくせにまじめにこなしたその果てに、わたしたちは迷子になることを忘れて、いますでにある地図の上しか歩けなくなってしまう。地図に描かれたさまざまな境界線の政治に鈍感になって、その線の通りに内と外をはっきり分けられるかように錯覚しはじめるかもしれない。

わたしは演劇の演出をしている。戯曲や小説や俳句などを上演のテキストとして扱うことと並行して、日常生活の記憶や写真といった、必ずしも文字によって記されていないものもテキストとして読みこみ、作品をつくってきた。自分にとってのテキストの領域を拡張していきたい、とつねづね考えていたので、はじめは、地図をテキストにできたらおもしろいんじゃないか、ぐらいの思いつきだった。でも、地図について考えていけばいくほど、ただ自分の上演のため、という枠におさめるにはあまりにアブないモチーフだということがわかってきた。

これはきっと、たくさんの人のアタマとカラダを巻き込んでしまわないといけない。だって、地図に潜在する政治に耳をそばだて、地図に振り付けられた身体をほだき、世界を測りなおして、新しく自由になるための地図をつくりたい、なんて欲望は、ひとりでは手に負えないわけで。しかも、誰かと一緒なのだったら、そのみんなと一緒に地図帳を編みたい、なんて思ってしまったのです。そう、願わくば、その地図に触れる誰かの身体が軽やかに踊ってしまうような、フリーハンドなアトラスを。

一緒に、やりませんか。

和田ながら